



ニーズに敏感であり続ける 花火師が目指すものとは

どんな業種でも時代に即した事業展開・経営努力が必要
変化を受け入れ、取り込んでいく姿勢を大切に



株式会社 和火屋

全国花火競技大会「大曲の花火」で知られる秋田県大仙市で、江戸時代から大名お抱えの花火師として誕生して以来、明治34年に煙火製造許可証を取得した株式会社和火屋。現在、4代目として代表取締役を務めているのが久米川和行さんだ。「世界中の人々に夢と感動を!」という言葉掲げ、代々受け継いだ技術を革新させ、時代のニーズを追っている久米川さんにお話を伺った。

代表取締役/花火師 久米川 和行

〒019-1701
大仙市神宮寺字福島家下56-1
TEL 0187-72-3366
FAX 0187-72-2737
<https://wabiya.co.jp>



HP



伝統に進化を。 江戸時代末期から続く花火屋

大曲の花火は、秋田を代表する集客力を持つ一大コンテンツだ。伝統文化である花火にも変遷があると話す久米川さんからは「時代を見極め、需要に応じる」という在るべき経営者の眼差しがうかがえた。

「基本的にどんな業種も時代の流れを無視することはできません。時代に即した事業展開、経営努力をしなくては生き残ることは難しい。一見すると変わらずに守り続けているように見える伝統産業でも、わからないようにその時代の人たちの求めに対応してきたはずです」。

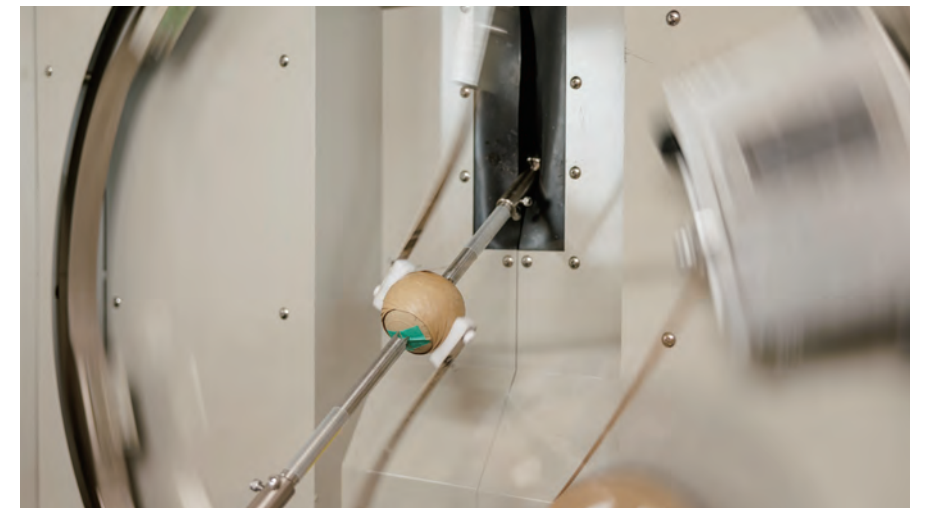
実際、花火にまつわる技術はどんどん革新を続けている。その一つがコンピューター制御による打ち上げだ。その発端となったアメリカのファイヤーワークスと一発で魅了することができる日本の花火とは別物であるが、近年では日本の花火も音楽とコラボレーションするなど、エンターテインメントショーとして進化している。



コンピューター制御による打ち上げに使用されるアメリカ製の操作卓。

コロナ禍で一転した花火業界 補助金活用で設備投資を実施

こうした中、花火業界を語る上で避けられないのが、新型コロナウイルスの流行だろう。全国で花火大会が中止となり、業界全体は大打撃を受けた。



手作業だった紙巻き作業をスピーディーに行う設備。5号玉まで対応ができるという。

逆境の中、同社では令和4年に事業再構築補助金を活用し、設備投資を実施。これまで手作業だった花火玉の紙巻きの工程を一部機械化することで生産性を格段に向上させたのだ。

「設備導入によって、花火玉を作ることができない打ち上げ専門の業者に卸して、売上を伸ばすことができました。また、花火のイベントはコロナ前に比べて増えており、設備投資の効果もあって昨年は前年比30%増の売上となりました」。

花火屋として地域にできること 心技一如の花火師になるために

そんな同社が今懸念しているのが、人口減少に伴う地域の衰退だ。

「地域が持続できるか不安な状況の中で、地元企業が地域に貢献できるようにならなければと感じています。花火で地域貢献しているように見える

かもしれませんが、それは仕事の延長線上であり、一企業として自主的にどのような形で地域のために何ができるのか、模索していきたい」と語った。

中学校卒業後にこの世界を志す者もいる中で、一人前の花火師になるための人材育成についても理念がはっきりしていた。職場環境はその人の人となりを作る最後の砦だと語る久米川さん。人として当たり前のことができることはもちろん、人生をかけて一つのことを追求できる精神が大事だという。

花火師としての久米川さんの思いもお聞きた。「人が見て感動できる花火、シンプルにきれいな花火を上げたいと思いますね。誰も見たことのないような、自分たちにしか出せない色を生み出したいと。それが花火師の目指すものだと思います」。

その誠実な人柄と、底知れぬ探求心をもって花火と向き合う花火師たちの姿勢が、大輪となって夜空に輝くのだ。



花火の火薬を配合する作業。一見すると同じように見える火薬だが、配合によって色合いは異なる。



真剣な表情で一つひとつ火薬を並べていく女性職人。